
光の下で生きていく。

黒鋼 朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の下で生きていく。

【Nコード】

N5840Z

【作者名】

黒鋼 朝陽

【あらすじ】

この作品は天空物語のカデシユの最期が納得できず、作ってしまった作品です。そして主人公がオリジナルキャラクターなので注意してください。

*今まで酷い仕打ちを受け、生きてきた少女。彼女はある日、顔見知りの少女をトラックから庇い、死んでしまう。しかし、彼女は死を目前にして神に願った。自分を必要としてくれる人が居る世界で

もう一度、人生をやり直したいと。その願いは叶い、彼女はとある世界へと転生した。その世界は誰もが懐かしき「天空物語」の世界で…！？

STORY 1 最期の願い

私は昔から嫌われていた。

近づくこと避けられ、話しかけると無視をされ、そのうち悪口を言われる様になった。

それを世の中では「いじめ」と言ったと思う。

今思い出してみると、自分の容姿が奇妙だったからだと分かる。容姿についての悪口が多かったからだ。

幼い頃はそれでよく泣いて母が頭を撫でて慰めてくれていた。

母は心が強く優しい女性ひとだった。

だから私もそんな女性で在りたいと思っていた。

だからこそ、「いじめ」に耐える事が出来たのだと思う。

しかし突然訪れた母の死によって全てが大きく変わっていった。

「いじめ」はどんどん酷くなっていった。

父からの暴力を受け、身体中に痣や擦り傷が目立っていく。

母が亡くなった事で私は耐え切れなくなり、家出を何度もした。

一人暮らしを始めてからは勿論、そんな事は一切無くなった。

大嫌いな父からの仕送りやバイトで何とか生活出来た。

容姿についてはたまに何か言われる事もあったが、気にする事は無かった。

一応、充実した生活を送れていたと思う。

しかし今ではそんな事を思い出しても意味が無い。

何故なら私は今、命の危機に面しているから。

大学からの帰る途中だった。
ランドセルを背負った少女が歩きながら泣いているのに気が付いた。
よく見ればそれはアパートで隣の部屋に住んでいて面識があった子
だった。
何が有ったのかを聞いてみようと思ひ、少しだけ近寄った。
だが少女は私に気づかず、そのまま車道を横切つて行く。
注意しようと近寄つていくと、彼女に向かって走つて来るトラック
があつた。

このままでは轢かれる！

瞬時にそう思つた私は少女へ向かつて走り出していた。
そして彼女の元へ辿り着くと、思いきり突き飛ばす。
その直後、トラックは私を嫌な音を立てて轢いて行つた。
飛び散る血液、歪んだ骨。
周りの人は悲鳴を上げ、それを聞いた野次馬が集まつてくる。
携帯で救急車を呼ぶ人もいるけれど、大抵は写真を撮っている人ばかり。

さっきの冒頭に戻る。
きつと先程のは走馬灯なんだろう。
死ぬ前を見る人生の記憶メモリーだと言われている。
ならば私はきつと助からない。

だけど神様が居るのなら私の一つだけの願いを叶えてください。

私を必要としてくれる人が居る世界で人生をもう一度だけやり直さ
せてください。

STORY 1 最期の願い（後書き）

ちなみに主人公の容姿は銀髪で紅色あかいろの眼です。

髪はストレスで中途半端に色が抜け、眼は病気というか何というか

…。

そんな感じの曖昧な設定なのでご容赦ください。

STORY 2 まばゆき光

此処は何処なのだろうか？

私は死んだのに何故、まだ生きているのだろうか？

私は真つ先にそう思った。

周りを見渡すとどこまでも広く、白い靄がかかっている。

そして暖かく、ふわふわとした空間だった。

こんなに暖かい所は久し振りだな…。

幼い頃、母に抱き締めてもらった以来かもしれない。

急に母の事を思い出して胸に痛みが走り、眼から涙が零れ落ちそうになった。

母が死んだ直後は胸が引き裂かれる様な痛みを感じるばかりだったが、今では思い出す度に恐ろしい程の虚無感と胸を？き塗りたくる位の寂しさを感じるだけだったのに…。

どうして今更、こんなに苦しく悲しい痛みが襲ってきたのだろうか？

痛みを耐えながら、私は少しずつ歩き出した。

とりあえず、此処は何処なのかを確かめなければ。

どれ位歩いただろうか。

先はまだ見えない。

しかし先程よりも確実に暖かく

いや、人の温もりを感じ

られるから「温かい」の方が合っているだろう。

なっ

どうして誰も居ないと思われる場所で人の温もりが感じれるのだろうか。

そう思いながら、休憩をする為に座り込んだ瞬間だった。

靄を吹き飛ばす程の光がいきなり前方の方から現れたのだ。
どんな濁りさえも浄化してしまいそうな光

私はすぐさま立ち上がり、光の方へ走った。

あの光で此処が何処なのか特定できるかもしれない。

そう思ったからだった。

意外にも光源は近く、すぐに着いた。

こんなにも近くに在ったのに何故気づかなかったのだろう、と思っ
てしまう位に近かったのだ。

私はその光に早速手を翳^{かざ}してみた。

当初の目的はとくに忘れ、久し振りに触れた人の温もりをもっと
感じたかったから。

当然、手は先程よりも温かい。

そして、私は馬鹿な事を思い付いてしまった。

光源に触るといふ馬鹿な事を。

普段の思考なら触れば熱い、という事がすぐに分かっただろう。

しかし、今の私の思考は久し振りに触れた人の温もりをもっと感じ
たいという事でいっぱいだったのだ。

そして私は光源に触れてしまった。

それはあまりにも熱く、すぐにでも手を離して仕舞いそうな程に。手を離そうとしたが離れる事は無く、逆に光球にどどん吸い込まれていく。

力を入れても離れる事は無い。

そして腕まですっぽりと吸い込まれた私は、突然脳内に響く様な美しい声が聞こえた。

『あまりにも哀れな生涯を送った少女よ…。死を目前とした私の魔力を受け取れ！』

その瞬間、私は全身を光球に吸い込まれた。

そして光源の在った空間はぐにやりと歪み、崩れ去って行ったのだ。つた。

数ある平行世界の一つに緑と人間が共存している世界があった。パラレルワールド

その世界は現代では空想の生き物とされる魔物に蝕まれていた。

魔物は人間を襲い、人間は疑心暗鬼になり人間を襲う。

この世界はそんな時代に成りつつあった。

そんな時、この世界のとある国の王妃から二人の子供が生まれた。

片方は男。

名は「カデシユ」レアルド「ストロス」。この国の第一継承者に成りえる子供。

片方は女。

名は「レティス」レアルダ「ストロス」。類稀な魔法の才能と大きすぎる魔力を持って生まれた子供だった。

STORY 2 まばゆき光（後書き）

次からストロス国でのカデシユと主人公の幼い時期を描写していただくと思うのでよろしくお願いします。

STORY 3 大切な家族

「わあ、待つてよ！早いよ、カデイ！」

カデイ 本名はカデシュ「レアルド」ストロス を追いかけて、私は走り回る。

捕まえられそうので、捕まえる事が出来ない。思ったより、カデイの足は速い。

私の名前はレティス「レアルダ」ストロス。

このストロス国の王女で、第二継承者。

実は私にはどんな人になって言う事が出来ない秘密がある。母にも父にも、そしてカデイにも言う事が出来ない秘密。

それは 私には前世の記憶があるって事。

物心ついた時にはもう、この前世の記憶はあった。哀しくて苦しい記憶。

私はその記憶を不意に思い出してしまって、よく泣いていた。そして母に抱き締めてもらって、いつもすぐに泣き止んでいた。泣き止んだ後はどうして、こんな記憶があるんだろう？と思っていた。

この記憶がとても嫌だったから。カデイにあるか聞いてみたけど、そんなの無いって言った。逆に「レティにはあるの？」って興味津々に聞かれた位だった。

だけど、この記憶が有って良かったと思つた事もある。

記憶に「ストロス国」や「カデシュ」、城を抜け出す時によく会う「スダヤ」の名前が有ったからだ。

そのお蔭で、今いる世界が分かったから。

この世界は恐らく、「ドラゴンクエスト 天空物語」っていう漫画の世界。

前世の私は何回も読み返したらしくて、セリフまでもが記憶に残っていた。

そして、数年後にこの国が滅びる事も……。

…こんなのを考えるのはやめよう。

今、近くに大切な家族が居るのだから。

「どうした？ケガでもしたの？」

気が付いたらカデイが私の顔を覗き込んでいた。

銀色の髪が顔にかかる。

「うっん、何でもない。考え事してただけだよ」

「なら良いんだ。じゃ、鬼ごっここの続き始めよう？」

「うん！」

私が元気良く答えると、カデイはにっこりと笑った。見ているだけで心休まる笑顔。

この笑顔をずっと見ていられたら良いのに。

だけどその為には、この国を守らなくちゃならない。

ならちよつとずつでも頑張っていこうかな。

「じゃ、今度は僕が鬼をするよ。だからレティは逃げてね？」

「ええ、カディ足早いじゃん！」

「じゃあ始め！」

「無視しないでよー」

中庭を走り回る双子の兄妹。

それをヒッソリと見守るストロス王と王妃。

こんな平和はいつまで続くのだろうか……。

STORY 3 大切な家族（後書き）

レティは若干ブラコンです。

「若干」だからカデシユラブって訳じゃないので。

次話はほのぼのとした日常を書こうと思います。

今回はレティが思い詰めてしまったので…。

STORY 4 魔法

「我が魔力よ、魔を滅する炎となれ！火球呪文！」

私は叫んで、指を振りかざす。

けれど小さな火花が散っただけで、他には何も起こらなかった。

今、私は魔法の練習をしている。

この前、父上に「魔法が使える様になりたい」と言ったら渋い顔をされた。

だけど根気良く説得してカデシユにも手伝ってもらって、ようやく魔法使いの方を他国から呼んでもらって教えてもらえる事になったからだ。

そして今、教えてもらっている。

「我が魔力よ、魔を滅する炎となれ！火球呪文！」

今度はカデイが火球呪文を唱える。

すると、とても小さい火の玉がカカシの方へ飛んで行った。

そしてカカシの生地を少し燃やして火は消えて行った。

「やったあ！」

カデイは喜び、駆け回る。

私は少し悔しくて、涙がつー、と流れてきたのをごしごしと拭った。

「御上手ですよ、カデシユ様。
それに比べてレティス様は……………」

わぁー、止める！

私を憐みの視線で見ないでー！

いや、ちよつとホントに止めてほしい…。

「レティも頑張つて！僕、レティが出来る様になるまで待つから！」

カデイがキラツキラの眼で見てる。

あ、そういえばこの国の王族って紅い眼なんだな！。

髪も銀色で、私だけが浮く事は無いし。

それよりも、魔法に集中しよう！

カデイにヒントでも聞いてみようかな？

「ねえ、カデイ。カデイはどんな火の玉を想像した？」

「僕？僕はね、中くらいの火の玉を想像した！」

子供らしい無邪気な笑顔。

大人になると、あの仏頂面になるのか…。

あの仏頂面にだけはならない様に頑張ろう！

えつと…中くらいの火の玉だっけ…？

集中、集中、集中……………！！

「火球呪文！！」

私は無詠唱で火球呪文を唱えた。

そしてカカシに指を振りかざす。

中くらいの火球がカカシの胸辺りに貫通する！
そしてカカシには大きな穴が出来て、倒れた。

「やったあ！」

私はカデイと手を叩き合う。

魔法使いは顔面蒼白になって、ブルブルと凍えている様に震えていた。

「何で…何でこんな子供が、私の使えない「火球呪文」^{メラ}を使えるの
よう…」

そしてレティが「火球呪文」^{メラ}を使える様になった事は一日で国中に
知れ渡った。

STORY 4 魔法（後書き）

レティスとカデシユがキャラ崩壊？しました。

後、呪文の前の詠唱は「天空物語」では記号っぽいので表してましたが、この小説では作者が勝手に考えているのでご了承ください。

S T O R Y 5 母親（前書き）

ちなみにレティスとカデシユは4〜5歳。

STORY 5 母親

「ねえ、母上。今日はどんなお話をしてくれるの？」

カディは安楽イスに座っている母上に強請る^{ねだ}。

「そうねえ…かつてこの世界を救った緑髪の勇者の話をしましょうか」

「えー、その話前に聞いたよー？」

「そしたら天界から地に落ちた天使の話をしましょうか？」

「その話もしたー」

カディが不満を募らせ、頬を膨らませる。

それを見た母上は、困った様な笑顔をしてカディの頭を優しく撫でた。

その様子を私は部屋の隅の方から見ていた。

良いなあ…羨ましい…。

私も前世ではよく母さんに撫でてもらったなあ…。

懐かしい思い出が蘇^{よみがえ}って来て、いきなり胸の痛みを思い出す。

その痛みはどんどん増していき、私は涙が流れて来そうなのをぐつと我慢した。

けれど痛みはどんどん強くなって、涙は頬を伝って服を濡らした。

「どうしたの？レティ。何かあった？」

母上が安楽イスから立ち上がって、私の所へ来る。カデイも心配そうに母上の後ろを追った。

母上は私の頬を流れている涙を指ですくう。そして顔を近づけてこう言った。

「哀しい事でもあった？それとも怖いお話を思い出したのかしら？」

「ううん。何にも無いの」

首を振って否定をする私を優しく撫でる母上。その手が無性に温かくて、更に涙は零れた。

「じゃあ、どうして泣いているのかしら？」

「…何だか胸こが痛い。怪我もなーんにもしてないのに痛いの」

まさか前世の記憶を不意に思い出して泣いただなんて言えないから、嘘をついた。

「…嘘、ね。そんなに隠したい事なの？」

私はコクリと頷くと、ギョツと抱きしめられた。

「私は貴女のお母さんなの。だからと言って全てを言わなくちゃ訳じゃないわ。」

「だけど、こんなにも早くに秘密を持たれるとは思わなかった。それはちょっと寂しかったかな」

母上は泣きそうな顔で微笑む。

「だからね、何かあったら私に頼るのよ？」

陛下に黙って城を抜け出す時も、私に一言言ってから行きなさい。
ちゃんと黙って置いてあげるから」

私とカデイの身体がビクリと震えた。

何時からバれていたのだろうか。

「大丈夫、怒らないから。」

二人共、皆と同じ生活がしてみたかったのよね。

今度、陛下に視察という名のお散歩を出来る様頼んでおくから」

今度は泣きそうな笑顔ではなく、本当に温かい笑顔だった。

私は母上の胸に顔を埋めて泣いた。

カデイもつられて泣き始め、母上の背中に顔を埋めていた。

母上はおんぶにだっこは無理らしく、床に倒れた。

そしてすぐに立ち上がり、私とカデイを抱き締めた。

「レティもカデイも私の子供だからね」

私はその言葉で更に号泣し、カデイも声をあげて泣いた。

母上の胸の中は温かく、凍っていた心が溶けていくようだった。

STORY 5 母親（後書き）

お母さん、庶民的（笑）

王族であり、二児の母親である人の話し方ってよく分からない。

だけどこんなお母さんであつてもいいと思うのです。

ちなみにレティとカデイの母親が話そうとした話の一つ目はドラクエ？、二つ目はドラクエ？です。

二つ目の話、どこで知ったんだろ…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5840z/>

光の下で生きていく。

2011年12月24日23時54分発行